

食傷

県立武岡台高等学校 二年

卅 6

鯔の焼死体を乗せた皿が、僕の目の前に運ばれてきた。食卓に置かれた魚と、ふいに目が合う。

言葉どおりの、死んだ魚の目だ。僕はそこに闇を見た。外の午後七時十四分の闇より深かった。何も映さないはずの目に覗かれている心地がして、僕は目を逸らした。

「純ちゃん、どうしたの？ 食べないの？」

火葬担当者が話しかけてきた。

「食べてくれないと悲しいな、って、お魚さんも言ってるよ。食べて食べて」

子供を騙す口調で、吐き気のする猫なで声で、尚も話しかけてくる。いつまでも子供だと思っているのだろう。骨をできるだけ素早く取り除く。付け入る隙を与えないように。

身を口に放り込む。塩の味しかなかった。

「お粗末さま。ふふっ、偉い偉い」

そう言って彼女は皿を下げた。魚が生きていた痕跡は、何も無くなった。

小さな頃は、僕は天才のように扱われていた。両親の期待を一心に受けて育ち、少し何かすると褒められる、我が家の希望の星、未来への一粒種。

母親は僕を産んだ時に子宮が傷つき、次の子供は望めなかったもので、僕への期待は相当に高まった。褒めて伸ばせという、流行りの本に書かれていた教育方針に盲目的に従い、一歩歩けば

「えらいねえ！ まだ三歳なのに自分で歩いてるよ、この間までだっこだったのがお母さんとっても楽だよ」

と褒められ、たとえ転んでも、

「おーよしよし、人は転んだりして傷つきながら大きくなるの、だから今一つ大きくなった、それに泣かなくてえらい」と今にも泣きそうなところを褒められた。

父親はごく普通の会社員だったが、母親は違った。母親の職業はタレント。僕の人生で唯一、特異な点がそこだ。タレントと一口に言ってもいろいろあるが、母親は大食いタレントだった。僕を産み落とした後は大食いママタレントになった。小さい頃は純粹な目で見ていたが、今となっては悍ましいものと思うばかりだ。

小学生のころはまだマシだった。あの頃はまだ何も知らず、母親の言うことを何も疑わずに聞いていた。門限は五時。ゲームは一日三十分。宿題をして、おいしいご飯を食べて、テレビを見て、お風呂に入って、歯をみがいて、寝ましよう。

生活の教科書に書いてあるスケジュールを寸分違わず完璧にこなした。

家では特にすることがなく、空いた時間はテレビを見ていた。

父親はそれを嬉しそうに眺めていたが僕は何の興味もなかった。

テレビに映り嬉しそうに何かを貪り食う母親は、僕がまだ産まれる前の姿をしていた。

父親は僕にあまり話しかけなかった。

つまりどうやら母親が僕を産んで体型が崩れたことを気にしていたようで、数年後に気づいた瞬間自尊心が音を立てて崩れる原因となった。

父親は家庭を省みない人で、そのおかげで母親は浮気放題だった。ネオン街の蝶のような、或いは涙目の道化のような化粧で、社長さんのところに向かっていった。

母親はテレビに出て帰ってきた後、必ずバケツアイスを食べる。あんなに食べた後に、だ。小二で初めてその事に気づいた時、僕は

「お腹いっぱいじゃないの？」

と思わず聞いた。母親は

「お腹はいっぱいだけど、気持ちと舌はいっぱいじゃないから食べてるの。」

と答えた。

満たされている筈なのに貪り食うその人とは、今でも相容れない。

クラスメイトは自分より馬鹿だと思っていた。否、思わされていた。百点や九十点が当たり前なのに彼らは何故平気で六十点五十点を取るのだろうか。馬鹿がうつる。

その思想を主に母親に態度で植え付けられた。あの人は僕が友達と遊んでいるといい顔はしなかった。そしてこう言った。

「純ちゃん？ 悪い子と遊んだら悪い子になっちゃうよ。純ちゃんは悪い子じゃないよね？」

「でもママ、たくやは悪い子じゃないよ」

「たくやくんは五時に帰るの？」

「ううん、たくやの家は門限六時までなんだよ」

「じゃあ悪い子だわ、門限は五時までって法律で決まってるのよ」

「そんな法律があるの」

「お母さん法律第六十三条」

だから友達はいなかった。

どう考えてもおかしいと思ってくれるだろう。横暴で、そしてもう一つ、タレントであればそんな子育てをしていて世間にバラされないのか、と。

あの人は子供騙しの嘘が上手いのだ。一つも表情を変えずに嘘がつける。絵本に出てくるキャラクターは「ギクツ」と言ったり青白い顔になったりして、嘘をついていると教えてくれる。だがあの人はそうではなかった。そのおかげでタレントとして炎上しなかったり営業もスムーズにできたり、まさしくあの人の武器だった。

騙され続けて、子供用の絵本の中のような、純粹無垢で何も無い、正しい生活を送った。

中学にもなるいろいろな事が分かってくる。

自分の生活が、母親が、何もかもおかしいこと。クラスメイトは馬鹿ではないこと。自分が馬鹿であること。

無気力に決められた事だけをして過ごしていたら、少しずつ腐っていった。

テストでは八十点前後を取るようになった。母親は僕のことを罵った。僕も母に反抗して見せた。僕はやっと一人で寝るようになった。

クラスではいじめられた。授業参観に母親が来た時、クラスメイトの前でベタベタと絡まれ、以来マザコンという渾名がついて囃し立てられた。マザコンキモい、毎朝ママに起こしてもらってるんだろ、肉体関係まであるんじゃないか、言動がおかしい、どこがおかしい、そこがおかしい、変態、腐れ脳みそ、近寄るな。

今でも目を閉じると聞こえる。

「死ねばいい」

三年間、心臓、肺、消化器、骨、筋肉、どここの異常も何の病気もなく孤独に過ごした。

『生きて』は、いなかった。

中二のころちょうど父は病気になり入院した。そしてそのまま、あっさりと死んでいった。

母親に合わせて常人の三倍食べる人だったから肝硬変で死んだ。その五倍食べる母親が何故生きているのかは自分には分からなかった。

父は焼かれて骨になって、一つの壺に収まった。

人一人だったものとして手に持った壺は、あまりにも軽い。僕は虚無感を覚えた。

母は赤ん坊のように、ポロポロと涙を零す。かつて他の生物の体液であり、蛋白質だった涙を。

その日は、特に『死』に敏感だった。死ぬって何だろう。骨になることかな。死んだ後はどうなるのかな。小学生のような問いを自分の頭の中で繰り返した。

夜の闇が、僕を死へ引きずり込む父の亡霊に見えて、母に抱きついた。

我ながら本当に情けない話だ。マザコンと呼ばれるのもむべなるかな。だがそうせざるを得なかった。

あんなに他の生物を取り込んでいるのだから、母は死なな
いような気がした。その生命力に頼ろうとして、その肉に顔
を埋めた。

「よしよし、大丈夫」

耳元で囁かれる。

「純ちゃんは大丈夫だから。お母さんが守るから。お母さん
の、大事な、大好きな純ちゃん」

腕に抱かれて、吞まれて、死の不安は消えた。別の不安、
劣等感が残った。いくら強がっても、所詮母に頼りきりの、
無力で悪趣味な人形に過ぎないのだと絶望した。こんな弱く
醜い人間を母親以外の誰かが望むことがあるのか？

食べた物が虚空に消えていく感覚がするようになった。自
分に何が出来たのか、何も分からない。食べた物が自分にな
るなら、その自分に意味が無ければ、食べることに意味は無
いだろう。

人生の価値は何かを生み出すことだ。

作品か、子供か、他者の生活か。それが出来ないものは落
伍者と呼ばれる。だから母親が嫌いになった。何も生み出さ
ないくせに無駄飯喰らいで、産んだ子供は役立たずなのだか
ら。あの女はそれでも『営業』に行った。『今後のためには外
せない』そうだ。家でテレビが流れていた。牛の死体を、千
切れた植物を、何十人分の食糧をぐちゃぐちゃと胃に流し込
んだあと、平然と発展途上国への援助を説く偽善で出来た番

組が。

「何もかも馬鹿馬鹿しいなあ」

一人になった部屋で呟いた。自分の口が勝手に動いて詠っ
ていた。

「ああ、いつそ死んでしまおう」

「何も生み出さないなら」

「母親に食われるくらいなら」

「いつそ」

「一死（矢）報いよう」

生まれ年のワインを飲み干す。悪魔と契約し墮落した気分
になって、何でも出来る気がした。

タンス預金を不正に引き出した。

死ぬ前に十万円、パーツと使おう。

家のカギはどこだっけ？

かけるつもりはない。

ただの嫌がらせのために持ち出す。

おっ、保険証はっけーん。

ドアを開けると水曜日の午前中の清々しい青空が広がってい
た。自分の気分とはあまりにも釣り合わず、僕はこの話の主
人公であっても世界の主人公ではないのだなと思って、ムカ

ついたので唾を吐いた。

顔に少しかかる。当たり前だ。自分にはこの幼稚性ゆえの屈辱が相応しいと感じた。

そしてなんの用もない方向に自転車を漕ぎ始めた。

死んでもいい人生のプレイはなんて愉しいんだろう。リアル・グラウンド・セフト・オートだ。

禁止されていた十八禁のゲームを思い浮かべながら、僕は赤信号を轢かれるギリギリで渡った。

スリル。そう、スリル。今まで僕の人生に欠けていたものが僕をどんどんヒトにしてくれている感覚がした。

手放し運転ですつ転んで顔に傷が出来たので僕は自転車を川の土手の下に蹴り転がした。もう一発蹴りを入れて川の中に落とす。

すると川の中で魚たちが驚いている。

「お前らぁー。捕まるんじやねえぞー。ドブス厚化粧女には特になー」

生き生きと四方八方に逃げる魚に向かって話しかける。動物に近づく気がして人の目も気にせず嬉しくなった。

「何やってんだお前さん」

見るからにホームレスであろうおっさんに声をかけられる。僕はこのおっさんにコンビニで酒とつまみを奢ることにし

た。

黙っていてくれ。

そのことを話して一万円握らせるとおっさんは何も言わず付いて来てくれた。

おっさん名義で買った追加のワインはさっきのより安い酸味がして、酔いが回ってきた。

飲んだ後は走って逃げた。お互い残り少ない命だ、生きろと説かれておっさんの時間を無駄にするのは避けたかった。

走る走る。千鳥足による、美しいフォームの転倒。そのまままクロール。川の水が服にしみ込んで気持ちよかった。

母親基準で洒落ている上着が濡れて気持ち悪くなってきたので脱いだ。

濡れたことで限定されるであろう九万円の使い道を考えながら上着をライブの時のタオルのように振り回して歩いた。

潰れたゲームセンターらしき廃ビルを見つけた。入れるようになってる。

今までの人生にない退廃と自由を感じ取ってビルに入る。バカと煙はなんとやらだが自殺者の高い所にかける思いや如何に。

屋上まで階段で登った。外に出るためのドアは閉まってい

た。ガラス戸。やることは一つだ。瓦礫を持ってピッチャー
第一球！

なかった自分の限界を遂に超えた。

パリン！ガシャン！

ソーシャルネットワーキングサービス「人生」

プレゼント企画。紙飛行機を折って……折って……

折れなかつたので適当に。

屋上から一万円札九枚を配布します。

ほい。ほい。ほいと。

ビルの反対側にも、ほい、ほい、ほいさ。

結局六万投げたところで飽きた。

残りの三万は三途の川の渡し賃に持つておくことにした。

まあいいだろう。

地獄かー。どんなところだろうなー。

わかつた、この人生もう一周か。嫌だねえ。

それじゃ、自己犠牲で暴食の悪魔を倒すとするか。サヨウ
ナラ。

どうか僕の来世における幸せを願わないでくれ、母上。

一番嫌いな人の一番の望みがそれならば、もう死ぬしかな
いからね。

フェンスを登った。そして今まで母親に逆らうことの出来